

# 回復促す歩行

## ロボが支援

### 長期に意識ない患者

長期間意識が戻らない「遷延性意識障害」の患者らの脳に刺激を与え、症状回復を促す歩行支援ロボットの臨床研究が6日、長岡市大手通2のまちなかキャンパス長岡で行われた。事故な

#### 長岡で臨床研究

どで意識を失ったままの患者が試験的に装着し歩く動作を繰り返し返すと、見守った家族からは将来的な研究の進展を期待する声が上がった。

家族らに支えられながら、アクティブ歩行器で歩く遷延性意識障害の患者6日、長岡市大手通2



2回目の学外臨床研究が実現した。

6日は県内外の5家族が参加した。腰に専用のベルトを装着した患者は座ったまま体を起こし、体を直立させた。機械の力を借りて足を前後に踏み出し、ゆっくりと5歩ほど歩いた。寝た状態から体を直立させるタイプもあるという。

新潟市秋葉区の阿部忠さん(32)は16歳で交通事故に遭って以来、意識を失っている。7月に装着した際はほとんど歩けなかったが、今回の改良タイプでは歩くことができた。母親の玲子さん(63)は「すがすがしい表情をしていて、歩くことの重要性が分かる」と話した。

小林教授は今後、脱着に時間がかからないベルトや、患者に負担のかからない体の固定方法などさらなる改良を加え、実用化を目指していく。

県内の遷延性意識障害や、アクティブ歩行器の臨床研究についての問い合わせは阿部玲子さん、090(52110)3562。

## 東京理科大・小林教授が開発 全身に刺激筋肉つく

ロボットを開発した東京理科大の小林宏教授(51)は、機械工学IIによると、自ら

動が伝わり、脳や筋肉、心肺機能などに刺激を与える。

小林教授は2004年、アクティブ歩行器「アークタイプ歩行器」の開発に着

手。これまでに遷延性意識障害や筋ジストロフィーの